JCM2025-03）　　2025.03.22　ooya

オープンソース AI の未来: OSI のオープンソース AI 定義（OSAID)

https://magazine.joomla.org/all-issues/march-2025/the-future-of-open-source-ai-the-osi-s-open-source-ai-definition-osaid

2025 年 3 月 20 日

人工知能とオープンソースの原則が交わることで、慎重な対応を必要とする新たな領域が生まれました。 オープンソース イニシアチブ（OSI）は、2025 年 2 月 27 日にアフィリエイト タウンホールを開催しました。 このディスカッションの目的は、オープンソース コミュニティの関係者を集めて、**オープンソース AI 定義（OSAID)** とオープンソース AI システムの将来について話し合うことでした。

このディスカッションでは、オープンソース AI 開発を取り巻く課題、機会、規制の枠組みについて、参加者に貴重な洞察が提供されました。

オープンソース イニシアチブ（OSI) という用語に馴染みのない方のために説明すると、OSI は「オープンソース コミュニティの構築、教育、および非独占ソフトウェアの重要性の認識を促進するための公的支援に積極的に関与しているカリフォルニアの公益法人」です。

オープンソース AI の定義が必要な理由

OSI の EU 政策アナリストである Jordan Maris 氏と OSI のエグゼクティブ ディレクターである Stefano Maffulli 氏は、「オープンソース AI」を構成するものを明確にすることが緊急に必要である理由を分析しました。 Maffuli 氏と Maris 氏によると、欧州連合の AI 法はオープンソース AI システムの免除を規定しているため、この必要性が高まった要因となっていますが、この免除の対象となるものの正確な定義が欠けています。

Maris 氏は、ブリュッセルでの会話に関する興味深い逸話を共有しました。 その会話では、MEP アドバイザーが直接**「オープンソース AI とは何**ですか?」と尋ねました。 これは、さまざまな利害関係者、特に大手テクノ

ロジー企業がオープンソース AI の定義を作成しようとしているため、重要な時期に出された質問です。 ただし、その方法は、オープンソース ソフトウェアに関連する従来の 4 つの自由と矛盾する可能性があります。

「オープンウォッシング」とその課題

タウンホールでは、大きな懸念が浮き彫りになりました。 それは「オープンウォッシング」の実践です。 これは、さまざまな企業が自社の AI システムがオープンソースであると主張しているものの、オープンソースの基本原則に反する制限を課していることを意味します。 マリス氏は、OSI は「ロビイスト軍団」と対峙しており、相当のリソース (ロビイスト 41 人、常勤 18 人、予算 900 万ユーロ) を持ち、オープンソース AI だけでなくオープンソースの概念そのものを再定義することに重点を置いていると説明しました。

「オープンウォッシング」 に携わる企業は通常、a) AI は使用制限を正当化する固有の脅威をもたらす、b) 広く使用されている AI システムにより、オープンソース AI の意味を定義する権限が与えられる、c) AI は従来のソフトウェアとは根本的に異なり、異なるルールが必要である、と主張します。

OSI の対応: オープンソース AI の定義

OSI は、これらの課題への対策として、**オープンソース AI 定義 (OSAID)** を開発しました。 OSAID は、従来の 4 つの自由を維持しながら、AI システムの独自の側面に対処しています。 OSAID によると、オープン ソースと見なされるには、AI システムは、ユーザーに次の自由を与える法的条件の下で利用可能である必要があります。 許可を必要とせずにシステムをあらゆる目的に使用すること、システムの動作方法を調べてコンポーネントを検査すること、システムを変更して推奨事項、予測、または決定を変更すること、変更の有無にかかわらずシステムをあらゆる目的で共有すること。

OSAID は、これらの自由を得るには、モデルの重みとパラメーター、システムのトレーニングとデータセットの作成に使用されるソース コード、システムのトレーニングに使用されるデータの完全なリスト、および法的に可能な場合は実際のトレーニング データセットへのアクセスが必要であることを示しています。

法的課題とオープン原則のバランス

OSI のアプローチでは、特に GDPR などのデータ保護規制やさまざまな著作権規則に関して、AI を取り巻く法的複雑さが認識されています。 OSAID は、4 つの自由が損なわれるのではなく、次のことが求められていると主張しています。 a) 法的および技術的に共有可能なすべてのトレーニング データは必須と見なされます。 b) 共有できないデータの取得場所に関する情報が必要です。 c) 複製の目的ですべてのデータの詳細な説明が必要です。 d) トレーニングおよびデータ処理コードの完全なリリースは必須と見なされます。

グローバルな共同設計のプロセス

OSAID を開発するために、OSI はグローバルな共同設計プロセスを経てきました。 このプロセスには、南米、北米、アフリカ、ヨーロッパ、アジアなどさまざまな大陸での対面ワークショップ、35 か国以上からの参加者によるバーチャルな参加、AI システムの分析、4 つの自由を構成する必要な要素の決定、既存のシステムに対する AI の定義の検証、フィードバックに基づく定義の反復的な改良に基づく体系的かつ構造化されたプロセスが含まれていました。

業界からの反応と批判

マリス氏によると、業界関係者は**大きな反発**を示した。 例えば、Meta は「オープンソース AI の定義は 1 つではない」と主張している。 さらに、Meta の Llama モデルには、特定のアプリケーションが許容使用ポリシーによって制限される、ユーザー数に基づく使用が追加の商用アイテムによって制限される、地理的制限 (たとえば、EU ユーザーは特定のマルチモーダル モデルから除外される可能性がある) など、問題のある制限が含まれているようだ。

マリス氏は、OSI のオープンソース AI 定義も、従来の「ソース」がないため「オープンソース」は AI の用語として不適切であるという議論、一部の利害関係者にとって開発プロセスが不公平または速すぎるという主張、OSI が使命を超えているという示唆、現在主要な商用 AI リリースがその基準を満たしていないため定義が制限的すぎるという懸念など、さまざまな批判に直面していると指摘した。

OSI のロードマップ – 今後の展望

オープンソース イニシアチブは、OSAID バージョン 1.0 を「会話のきっかけ」と見なし、継続的な開発のロードマップを概説しています。

2025 年には、主要な問題を記録する多国間ワーキング グループの設立、AI 分野の監視と進化する実践の観察、LLM/GenAI 以外の AI アプリケーション (バイオテクノロジー、医療、視覚など) の調査、そして最後に OSI フォーラムやカンファレンスを通じて一般からのフィードバックの収集が含まれます。

2026 年には、特定された主要な問題に対処するプロセスを実行し、2026 年第 4 四半期までに定義を更新します。

ヨーロッパの状況

ジョーダン・マリス氏は、「ブリュッセルのヨーロッパの政策環境には、オープンソース AI のビジョンは Meta と OSAID の 2 つしかない」と強調しました。 これが、OSI が積極的に議員を教育し、「オープンウォッシング」に対抗する取り組みを行っている理由です。 これは、議員とそのスタッフにこれらの問題を説明し、汎用 AI の行動規範に関する EU 委員会ワーキング グループに参加し、「オープンウォッシング」の事例を取り上げ、OSAID を明確で原則的な代替案として提示することで行われます。

結論

OSI アフィリエイト タウン ホールでのプレゼンテーションでは、オープンソースの原則、AI 技術、企業の利益、規制の枠組みの間に複雑な相互作用があることが明らかになりました。 AI は今後も進化を続け、私たちの技術環境を再構築していきます。 OSAID は、オープンソースの価値が損なわれたり、ユーザーの自由を損なうような方法で再定義されたりしないように努めていきます。

コメント

フリーソフトウェア財団（FSF）は、AI の定義に関する立場をまだ表明していません。 近いうちに表明されるものと予想されます。

リソース

この記事に以下のリソースを含めるのに協力してくれた OSI の Nick Vidal 氏に特に感謝します。

PDF ファイル

- 2025---affiliates-town-hall
- OSI-town-hall-presentation

FOSDEM の Web サイトにある同じプレゼンテーションのビデオ録画

ヨーロッパに OSAID が必要な理由: オープンウォッシングと AI 法、Jordan Maris 著
オープンソース AI 定義の紹介、Stefano Maffulli 著

Joomla コミュニティ マガジンに掲載されている記事の一部は、特定のトピックに関する著者の個人的な意見や経験を表し、Joomla プロジェクトの公式見解と一致しない可能性があります。

著者について
マリア・スカンプーラ MBA、MCMI について

マリアは Open Source Matters Inc. の新しく選出された社長です。 Open Source Matters (OSM) は、Joomla! プロジェクトの財務的および法的利益のために設立された、米国で設立された非営利団体です。

常に起業家精神に情熱を傾けるマリアは、英国ロンドンに登録されている B2B WebDev SaaS スタートアップ DEVELOPABLE の創設者兼 CEO です。 DEVELOPABLE は、忙しいビジネス オーナーが事前のコーディング知識なしでワンクリックで Joomla! ウェブサイトを作成できる Software as a Service (SaaS) プラットフォームです。

マリアは、BSEEN、Arden Enterprise Incubator、シティ ユニバーシティ オブ ロンドンなどのプログラムでメンターとして学生や卒業生起業家に集中的なスタートアップ サポートを提供することで、起業家精神への情熱を共有してきました。

マリアは、英国レスター大学で財務を専門とする MBA を取得し、英国公認経営協会（CMI）で戦略管理とリーダーシップのレベル 7 ディプロマを取得しています。CMI の価値観に献身的に取り組み、英国公認経営協会のウェスト ミッドランズおよびノース ウェスト ボードでソーシャル メディアおよびコミュニケーション リード（NED）を務めました。

今後数年間は、AI システムがソフトウェアのように真にオープンになるかどうかを決定する上で重要な役割を果たすでしょう。 真にオープンな AI システムを定義し、推進する OSI の取り組みは、業界の有力企業からの挑戦に直面していますが、同時に、オープンソースの利点をこの新しい変革的テクノロジーにまで広げる機会も失っています。

そのため、OSI は、オープンソースの原則を支持し、AI 開発において重要な役割を果たすと考える個人や組織に、OSAID を支持し、オープンソース AI の将来に関する進行中の議論に参加するよう呼びかけています。

コメント

フリー ソフトウェア財団 (FSF) は、AI の定義に関する立場をまだ表明していません。近いうちに表明されると予想されます。

以上